

花嫁修業はご遠慮します

今夜はホクホクの栗ごはんが食べたい。そして週末あたり、肩下まで伸びた髪を切りたい。いや、これから秋が深まっていくのだから、寒くないようこのまま伸ばしてみてもいいかもしれない。などと思っていた藤村一葉の耳に、不機嫌そうな声が届いた。

「誰が作ったんだ、この資料は」

営業企画部長、宮瀬だ。その場にいる全員に緊張が走る。

こういうときに限って優しい課長はいない。

一葉はそろそろと椅子から立ちあがり、宮瀬のデスクに向かった。

「……私です」

すると彼はパソコンの画面から目を離さずに、机上に置いたプレゼンテーション資料を顎でしゃくった。

「なんだこれは」

こちらを見ようともしない態度にかちんとしつつも、一葉は答える。

「なんだとは、なんででしょうか？」

「読みづらい、まとめ方がおかしい、わかりづらい。二時間も使って何をやっていたんだ？」

どうして、その資料の作成に二時間かかったことを知っているのだろうか。

「き、きちんと先輩方に確認しながら作りましたが、不備がありましたか？」

そこでようやく宮瀬が顔をあげた。

彼は黙っていたら相当のイケ男である。

百八十センチ超えの引き締まった体躯に、スマートなスーツ、清潔感のあるサラリとした黒髪、クールな印象の瞳に、すつと通った鼻筋、嫌みのない薄い唇——いわゆる容姿端麗な彼に、大抵の女性は目を惹かれてしまうのではないだろうか。

一葉も第一印象はそう思った。けれど、それもいまは昔。彼のイメージは、すつかり最悪なものへと変わっている。

「教えてもらうのはいい。だが、これを自分で見て何も思わないのか」

「自分で、とは……？」

「気づくこともできないなら、お前がやるな」

抑え気味の声とはいえ、周りには絶対聞こえているはずだ。それに怯むことなく一葉はたずねた。「どういう点がダメなのか教えてください」

「ただ上に言われた通りにやればいいってもんじゃない。営業事務は営業の仕事がスムーズに回るよう補助する役だ。お前はそれを根本的にわかっていない。地味な役回りでも事務がしつかりしてくれなければこちらも仕事ができないんだ」

「それはわかります、けど」

「初めてこれを目にする者の身になって作れ。考えろ、と言っている。十五分で作り直してこい」

宮瀬は再びパソコンに顔を向けてしまった。

「……鬼」

「何か、言ったか？」

顔をあげた宮瀬の低い声と鋭い視線に射抜かれる。一葉は、背中がぞつとした。元ヤンキーなのだろうかと思いたくなるほどの表情だ。

「なっ、何も言ってもせん！ やり直してきますっ！ すみませんでしたっ！」

急いで素直に謝り、逃げる。ぐずぐずしていると、さらにどやされるのだ。それだけは避けたい。一息つく間もなく、デスクに戻ると同時に電話が鳴った。

仕方なく、受話器をとる。

「はい、虹丘レザークラフトでございます」

一葉は営業事務を担当している。大学卒業後に入社して二年目の、まだまだひよっこだった。

「虹丘レザークラフト」は都内のビルに社を構える、老舗の革製品メーカーだ。「クラフト」 というオリジナルブランドを展開し、バッグや靴、ステーショナリーなどを製作、販売している。

しかし数年前、新しいメーカーの台頭によりシェアを奪われ、十店舗あった直営店は五店舗を閉鎖していた。また、全国の百貨店やショッピングセンター内に入っていた店舗の半数を引きあげざるを得ない状況に陥っていた。そんな会社に、危機感を持った社員が次々辞めていった時期に、一

葉は入社したのである。

そして時を同じくして、赤字続きの会社を救うべくヨーロッパから呼ばれたのが、宮瀬だった。宮瀬はドイツとイタリアで企画コンサルタントの仕事をしてきたそうだ。敏腕マーケティングとして活躍中に、急ぎよ虹丘レザークラフトの営業企画部長となった。

彼は入社したその日から、社内にはびこる古い考えをとっばらって、滞^{stagnant}っていた企画の見直しと立ちあげを行い、利益率のあがらない商品を切りまくった。逆に質のいいものや新しいデザインは、どんどん取りこんでいった。

ホームページ、カタログ、広告、各店舗の内装に至るまですべてを一新させ、さらに営業戦略を根底から変えた。わかる人にだけわかればいいという、今までの一見様お断りに近い方針をやめ、虹丘レザークラフトの売りである「革職人」による製作現場を、しつこいくらいに宣伝したのだ。それらにかかった費用は莫大なものだった。にもかかわらず、わずか一年半で社は赤字脱出をしている。彼はとんでもない男なのだ。

その宮瀬になぜか一葉は目をつけられているようで、何かというと仕事を命じられてはしごかれていた。

そんなことを思い出しつつ、一葉は電話の応対をする。

営業事務というのは、思ったよりも守備範囲が広いものだと思職して知った。電話の取次ぎ、商品在庫の管理や納期の把握、資料作り、発注メールの確認、営業との連携等、息つくヒマもない。

「藤村さん、さっきのできました？」

電話を切ると、営業の男性、山中^{やまなか}が声をかけてくる。宮瀬に呼ばれる直前まで作っていた書類の催促だ。

「うっ、ちよっとだけお待ちをつ！あと少しでできますので」

汗を掻きつつ、パソコンを確認する。電話の処理をしなければならぬし、資料の作り直しもやらなければならない。

「いいよ、ふじちゃん。さっきの電話は私が対応しておくから、カタログナンバー教えて？」

「すみません、竹本^{たけもと}さん！」

となりの席の竹本が助け舟を出してくれる。彼女は一葉より二つ歳^{とし}上の先輩だ。

電話の件は彼女に頼み、即行で書類を仕上げる。

「山中さん、お待たせしました！」

「忙しいのにごめんね、急がせて」

「いえ、こちらこそすみません」

「ていうかき、宮瀬部長が藤村さんを待つてるっばい雰囲気すごいんだよ。ほら、こっちは見てる」

山中に目配せをされた一葉は、恐る恐る宮瀬のデスクのほうを向いた。離れたところからでもわかるほど、彼の視線が一葉に突き刺さっている。

「うぐ……っ」

思わず声が出てしまう。あの目で睨まれると進むものも進まない。一葉は部長から目をそらし、

資料を手にした。

「十五分、だっけ？」

山中があわれみの滲む声で問う。

「も、もうやだ……無理に決まってるのに」

「ま、がんばれよ」

苦笑いした山中はプリントアウトした書類を掲げて去っていった。……あと五分しかないではないか。

どうにか資料を作り終え、昼休みになった。

「宮瀬部長って容赦ないよねー。私たち営業事務のことなんか課長に任せておけばいいのに」

「自分で全部チェックしないと気が済まないんだよ。特にふじちゃんに対して厳しいんだから、かわいそう」

昼食後のトイレはメイク直しの女性でにぎわっている。一葉は個室でストックキングを穿き直しながら先輩たちの話に耳を傾けていた。

「でもまあ、あの部長がきて一年半だけど、確かに売りあげは伸びてるし、敏腕なのは認めざるを得ないかな。あと、ものすごいイケメンなのもポイント高いし」

「イケメンならいいってもんじゃないけど、やっぱりカッコいいよね。独身って話、本当なの？」

「本当らしいよ。指輪もしてないし」

「部長ならよりどりみどりでだろうに、結婚しないのかなあ」

「結婚なんて、できるわけがありません！」

トイレから出た一葉は、先輩たちの間から洗面所に割りこんだ。

「ど、どうしたの、ふじちゃん」

「あんなに神経質でうるさくて、血も涙もない男、結婚なんてできるわけがないっ！ ですっ！」

手のひらいっぱい、泡のハンドソープを塗りたくる。そしてイライラした気持ちを静めるように、ごしごしと洗った。

「そーんなこと言って、もしも部長に……そうねえ、もしもよ？ プロポーズとかされたらどうする？ ちょっとはその気になっちゃうでしょ？」

「あり得ないこと言わないでください」

トーンの低い声で答え、ふわふわの泡を水で一気に流す。

「だからもしもよ、もしも」

「即、お断りします。愛のない結婚は絶対にイヤですから」

「愛のない結婚って、そこまで部長が嫌いなもの？」

アハハと、竹本とその同期の染谷が声をあげて笑った。仲のよい先輩とはいえ、後輩をからかうのはどうなのだ。

「仕事に好き嫌いを持ちこみたくはありませんが、ひとりの男性としては非常ーに苦手なタイプです！」

鼻息荒く答える一葉に、先輩たちが怯む。

「ご、ごめんごめん、冗談だから」

「そんなにイヤがるとは思わなかったのよ」

なだめるように、ふたりは一葉の肩をぼんぼんと叩いた。

「わかっていただければ大丈夫です」

噂によると、宮瀬は社長の遠い親戚であり、また社長に実力を買われているため、役員たちも文句を言えないらしい。結果を次々と出す彼の言い分が正しいということもあるのだが。

どうせなら副社長にでもなっつけてくれればいいのに。そうすれば、一葉と直接関わるものがなくなる。

実際、社長は彼を役員に推したが、現場で動けなくなることを理由に宮瀬が断った、という話も聞く。出世よりも実を取ったのならば、そこは尊敬してあげてもいい……などと上から目線で密かに思う一葉だった。

忙しさが途切れた午後三時。前に座る染谷が電話を取った。

「いえ、こちらこそお世話になっております。はい、少々お待ちください。ふじちゃん、お家からお電話よ」

「えっ、私ですか？ すみません、なんだろう？」

自宅から会社に電話がくるなど初めてのことで。……イヤな予感がする。

「もしもし？ うん……えっ、おばあちゃんが!? うん、わかった……また連絡する」

それは父方の祖母の、突然の訃報だった。

事情を聞いた先輩たちに促され、一葉は宮瀬へ報告に行く。

「部長、すみません」

どうにか早めに帰らせてもらえないだろうか。状況を整理して説明しようとするけれど、上手い言葉が浮かばない。

「どうした」

「いま、父方の祖母が亡くなったと連絡が入りました」

「え!？」

宮瀬が目を見ひらいた。少し驚きすぎのような気がする。

一葉の祖母が亡くなったことで、何か支障があるのだろうか。

「部長？」

「いや……そうか。ご愁傷さまです」

けれど、すぐにいつもの宮瀬に戻った。いまのはなんだったのか。

「恐れ入ります。それで今日は——」

「ああ、気にしないですぐ帰りなさい。重要事項だけ周りに伝えておけばいい」

「す、すみません。ありがとうございます」

宮瀬のほうから帰るように言ってくれるとは、意外だ。

だが正直、助かった。

祖父が亡くなったあと、祖母は自分たちと同居していて、一葉は幼いころから、おばあちゃん子だ。だからきつと動揺が隠せず、このあと仕事にならないと思う。すでに頭が真っ白だったのだ。一葉は宮瀬の気遣いをありがたく受け取った。

三日後、祖母の通夜がおこなわれた。祖母はたっただいま眠ったばかりのような、穏やかな顔をしている。おばあちゃん子の一葉にとつてそれが救いだっただ。

少しだが、時間が経ったことで一葉の気持ちはだいぶ落ち着いている。祖母との思い出を胸に呼び起こしながら、親族の席で弔問客ちゅうもんきやくに会釈えしやくをした。

祖母は短歌の会や絵葉書の会、歩こう会などの趣味の集まりに多数、参加していた。また、着付けの師範でもあったので、関係者がたくさんきている。

「かずちゃん、あつちいこー」

焼香が長く続き、途中、従姉いとこの利恵としえの子ども——美春みはるが、一葉の黒いスカートを引っ張った。

「ダメよ美春。もうちよっとだけお座りできる？」

利恵が小さな声でたしなめる。

「いいよ。美春ちゃん、行こう」

「いいの？」

申しわけなさそうに言う利恵に、一葉は小さく笑った。

美春はまだ四歳だ。通夜の席に飽きてしまうのは仕方がない。利恵は下の子どもこどもの乳児の世話で疲労しているし、利恵の夫はその子を抱っこしていて手が空かないのだ。これくらいなんでもない。「大丈夫。私もおトイレ行きたいから」

「じゃあお願い。ごめんね」

「ううん」

一葉はそつとその場を離れ、美春を連れ出した。葬儀会場から廊下に出る。

「ん？」

ふと、受付にいる男性の後ろ姿が目にとまった。

「……宮瀬、部長……？」

一葉は無意識に鬼上司の名前をつぶやいていた。

(まさか、ね。こんなところにいるわけないけど、でも……)

「かずちゃん、ジュース飲みたい」

「え、ああ、うん。買いにいこう」

一瞬、確認しようか迷ったものの、美春に引っ張られて、男性とは反対方向へ歩き出す。

——どこか寂しげな、疲れの見える背中が、似ていた。

思わず、廊下の大きな窓ガラスから外を見る。夏の強い日差しは鳴りをひそめ、木々に柔らかな光を落としている。そう、あれはちょうど一年前の、こんな季節の朝だった。

——入社して半年がすぎた、十月初め。

「まだ暑いなあ。朝からイヤになっちゃう」

その日、残っていた仕事に気がなっていた一葉は、早めに家を出て会社に向かっていた。

「あ、可愛い。デスクに飾ろうかな」

早朝から開いている花屋の前で立ち止まる。

白のピンポンマムというまん丸の菊や、白いフリージア、ピンクやチョコレート色のコスモスをあしらった秋らしいプチブーケが気に入り、購入した。

社に着いた一葉は、制服に着替えてすぐに給湯室へ向かう。小さな花瓶にプチブーケを活けた。

可愛らしい花が揺れる様子に、思わず笑みがこぼれる。

今日も一日頑張ろう。素直にそう思えた。

そして、元氣よく自分のフロアに入る。

「宮瀬、部長……？」

部署内で一番に出勤した一葉が目にしたのは、宮瀬がデスクでうたたねしている姿だ。

社へ引き抜かれてから半年間、宮瀬は誰よりも早く入社して、毎晩残業をしていた。何時に帰っているのかまでは知らない。

部下に対する以上に自分に厳しい彼は、連日の忙しさと相当疲れていたのだろう。

(もしやひと晩じゅう、ここにいた……?)

宮瀬の昨日のスーツを思い出そうとしたが、わからない。

一葉は花瓶に活けた花を半分抜き取り、自分のデスクに置く。そしてまだ目を閉じている宮瀬に忍び足で近づき、花瓶のほうを彼のデスクにそっと置いた。

けれど、宮瀬に背を向けたあとで考える。

(お疲れさま、っていう意味なんだけど……余計なことをするなって怒られちゃうかな。よく考えたら、部長はお花なんて好きじゃなさそうだし)

やはりやめようかと思った、そのとき。

「……ありがとう」

後ろからひとこと、声が届いた。

「え？」

振り向くと、目を覚ました宮瀬がこちらを見つめている。夏よりも低いところから入る朝日が彼を優しく照らしていた。

一葉はほんの数秒、その姿に見入ってしまう。朝の光よりも、飾った花よりも、彼の姿が美しく見えた。

「綺麗な花だな」

宮瀬の言葉にハツとする。

初めて目にする穏やかな彼の微笑みに、一葉の胸がきゅっと痛んだ。なんの痛みなのかはわからない。常に厳しい宮瀬とふたりきりだからか、見たことがない表情に戸惑ったせいなのか。

「これは、なんという名前の花だ？」

宮瀬は花瓶の花を、長い指で弄もてあそんでいる。花の名前など気にするようには思えないのに、意外な質問だ。

「どの花ですか？」

「この丸いのだ」

白い花が指さされた。

「ピンポンマム、だと思います。菊の一種です」

一葉が答えると、宮瀬は目を細めて花を眺める。

「へえ、菊なのか……可愛いな」

「っ！」

「どうした？」

「い、いえっ」

またも意外な言葉を聞いてしまった。他の女性社員たちが聞いたら卒倒ものかもしれない。一葉にはそんな効果はないが。

「それにしても、藤村」

「は、はい」

きりつとした声を受けて背筋が伸びた。先ほどの穏やかな表情は消え去り、いつもの宮瀬に戻っている。

「今朝は早いな。何かあったのか？」

「昨日やり残したことが気になって、早めにきました」

「そうか。まあ、頑張れ。わからないことはそのままにしておくなよ」

「はい」

一葉は今度こそ宮瀬に背を向け、自分のデスクに戻った。もう少しだけ、彼の貴重な姿を見ていなかった、かもしれない――

当時のことを思い出した一葉は、自販機の前で苦笑する。

「そんなこととつくに忘れちゃってるよね、部長は」

「かずちゃん、なあに？」

「ううん、なんでもない。なんのジュースがいい？」

「オレンジ！」

「じゃあ私は紅茶にしようかな」

――ありがとう。

あのときの宮瀬の声が、なぜか耳に残っていた。

祖母の四十九日がすぎた十一月中旬の土曜。深まる秋が冬の準備を始め、寒さを連れてくる。一葉はリビングで録画しておいたドラマを観ていた。そこへ父母がそろってやってくる。

「……おばあちゃんの遺言？」

「ああ、そうなんだ」

正面のソファに座った父母は真剣な表情だ。思わず一葉も姿勢を正す。

「いろいろ記載されているうちのひとつに、一葉の許嫁いらいなむすめに関するものがあつたんだ」

「私の、許嫁!?」

あまりにも予想外のことを言われたため、一葉は前のめりになって声をあげた。

「私たちも驚いたのよ。おばあちゃん、生前にそんなこと、ひとことも言つてなかつたから」

「お相手は、おばあちゃんの初恋の人のお孫さんなんだ」

「な、何それ……」

動揺する一葉とは逆に、両親は落ち着いている。

「おばあちゃんの初恋の人は旧華族の家の男性だったそうだ。身分違いで当時叶えられなかつた夢を、孫同士の婚姻で叶えたい。そういう遺言だったんだよ」

許嫁いらいなむすめだの、旧華族だの、いったいいつの時代の話なのだ。

「そんな時代錯誤な話はおかしいよ。初恋の人との夢を叶えたいだなんて、それじゃあ、おじいちゃんがかわいそうじゃない」

「いやそれが、父さん——おじいちゃんは、おばあちゃんに初恋の人がいるってわかつて結婚したよなんだよ。もちろん、結婚してからは仲睦まじい夫婦だったんだが、おじいちゃんのほうが気にしてたらしいね。そういう約束をしていたなら孫に夢を託してもいいんじゃないかと」

「なんで孫なの？ 自分の子どもじゃなくて」

「お互いに男しか生まれなかつたからみたいだ。俺も含めて。だから孫に、と思つたんだろいな。

それでもダメならもつと先につてことで、遺言に残したらしい」

父は母が淹いれた緑茶をぐくりと飲んだ。

混乱した一葉は、なおも父に詰め寄る。

「で、でも、おばあちゃんがそう思つていたからつて、向こうの人だつていまもそう思つているとは限らないでしょ?」

遺言で結婚するなどまっぴらごめんだ。顔も知らない男性と諸々をすつとばして婚約なんて絶対にイヤである。

「それがね……おばあちゃんのお通夜にきてくださつていたのよ、その方」

そう言いながら、母も茶を啜すすった。

「え?」

お通夜にきていた……? そんな若い男性がいただろうか?

「あ……」

思い出したのは、宮瀬に後ろ姿が似ていた男性だ。あの人か、その旧華族の孫だった?

「それで先日も、おばあちゃんのほうに孫の婚約についての遺言があるか、確かめにいらしたんだ」

「おばあちゃんの初恋の方は、二年前に亡くなつていらつしやるそうよ。当時、あちらの遺言状でうちのおばあちゃんのことを知つて、こちらの事情を調べたらしいの」

「おばあちゃんに家庭があるのを知り、昔の話を持っていっても迷惑だろうということで、この話は消えかかっていたらいいんだ。だが、おばあちゃんが亡くなったのを聞いて、通夜にきてくださってね。それで後日、あちらのことを教えてくれた。初恋の相手同士、本当に遺言していたことを確認し合ったよ」

故人が遺したものをむげにできないのはわかるが、やはり理不尽だ。それにしても、と、一葉の頭にひとつ疑問が浮かぶ。

「どうしてあちらは、おばあちゃんが亡くなったことがわかったの？」

「それは……まあ、あとで教える。とにかくだな」

父がこぼんと咳ばらいをすると、母が身を乗り出した。

「一葉、花嫁修業に行つてらっしゃい」

「へ……？」

聞き慣れない言葉に一葉は首をかしげる。

「昨日ね、お父さんとそのお宅に行つてきたのよ。本当に華族のお家だったわ。いと違って、昔なら許されない関係——身分違いだったというのがわかるほど、すごいお宅なの。だからあなたがあちらの家に慣れるためにも、花嫁修業をしたらどうかって言ったのよ。そしたらすぐいらしてくださいって。だから早速、明日の日曜日から行つてらっしゃい」

次から次へと出てくる現実味のない話に、ぼかんとしていた一葉だが、明日行けと言われて意識がはつきりした。

「は、花嫁修業とか！ それこそ時代錯誤だよ！ おばあちゃんの話は、大好きだよ。でもいくらおばあちゃんの遺言にあるからって——」

「あなた、彼氏はいるの？」

母の冷静な声に遮られる。

「な、何よ急に。……いないけどさ」

両親の前で告白するのは恥ずかしすぎるが、隠しても仕方がない。

一葉は、この歳までまともに男性とつき合つたことなどなかった。高校生のころ、好きな男子と手をつないで帰つたことがあるくらいだ。

「私はね、一葉！ あなたをそろそろ自立させなくてはいけないと思つていたのよ！」

突如、母が厳しい顔つきに変わる。

「自立？」

「そうよ。いい加減に、考えてもらわないとね」

ため息をつく母を見て、一葉はやれやれと肩をすくめる。

「ひとり暮らしもしないで、いつまでも実家にいるから？ っていうかさあ、いまの時代、なかなか外に部屋を借りられないでしょ、お給料少ないんだし。お母さんたちのころとは違うんだよ」

「そういうことを言ってるんじゃないの。いい？ あなた、なーんにもできないでしょ？ お料理も、お洗濯も、お掃除も、やるうともしないで、みーんな、お母さんに任せっきりじゃないの」

「だって私、働いてるんだもの……」

朝から晩まで会社で働いてくたくたになり、家に帰るともう何もしたくなくなる。それは父だって同じだ。自分ばかりが責められるのはおかしい。

都合のいいことを考えながら、一葉はソファの背もたれに体を預けた。

「あのねえ、お母さんだってパートに出てるのよ？ 『いまの時代』は男女平等、結婚しても共働き、家事は夫婦で分担、なんでしょ？」

父がぎくりと肩を震わせる。

「いつまでも何もできませんでは通用しないの！」

「それは……そう、かもだけど」

一葉は父が小さくなる気配を感じ取り、自分も肩を縮ませた。

「家にいたら結局、何もしないんだから、外で鍛えてもらいなさい。それにね、旧華族のおうちなのよ。ちよつと興味ない？」

「全然ない」

「あなた『華族』というものを全然わかってないでしょ。世が世なら貴族よ？ お嫁さんは、そこそ家のことをしっかりできなければならぬんだから。それであちらに、花嫁修業をさせてくださいってお願いしたのよ」

「だから勝手に決めないでってば……！ それにまだ私、結婚する気なんかはないよ。向こうもきつと迷惑だって」

「あら、あちらはぜひひにと言っていたわよ？」

「どうしてみんなノリノリなのよ……、なんで反対しないの」

相手のお宅の気持ちもわからない。いい家柄の人たちが、顔も知らない一葉のことをよく受け入れる気になったものだ。

「私がものすごい美人なモデルだとか、企業家のキャリアウーマンだとか、せめてそういうのだったらいいかもしれないけど、どこにでもいるような十人並みの容姿の平凡な育ちの娘なんて、どうせ最終的には受け入れてもらえないよ」

「卑下しすぎないの！ 一葉は可愛いわよ、お母さんが保証する」

「お父さんも保証するぞ」

親バカなふたりを前に一葉はため息をついた。両親は何を考えているのか。

「別に結婚しなくなつていいのよ。とりあえず行けば、きつと……おばあちゃんも喜ぶ」

一葉の胸がずきんと痛んだ。どんなときも一葉に優しくつた祖母を思うと、いまでも涙が出そうになる。

どうせなら祖母の口から聞きたかった。そうすればまだ、納得できたかもしれない。

「……じゃあ、自分で行って、直接断つてくる。それならいいでしょ？」

「そうね。どうしてもあなただがそうしたいなら、遺言には沿えませんか？ 言つてらつしやい」

イヤがつているのが自分だけなら、それしかないのだろう。覚悟を決めた一葉は、いったんお茶を飲んで心を落ち着かせた。

「ところで、相手はなんていう人？ 写真はないの？」

素性はわかったが、どういった人なのかくらいは知りたい。

父が顔をしかめる。

「写真は……ないな」

急なことだから、それは仕方がないか。

「じゃあ名前は？」

「宮瀬克さん、三十二歳だそうだ」

「……は？」

一葉は思いきり顔を歪めて問うた。聞き間違いだろうか？

「だから、宮瀬克さんだ。お前は二十四歳だから、八歳差だな」

父は一葉に聞こえるよう、はきはきと繰り返した。

「みっ、宮瀬っ!？」

「どうしたんだ？」

「う、うん。別に」

反射的に叫んでしまった。いくら苦手な上司と同じ名字だったからといって、動揺しすぎだ。しかし——

（部長の下の名前ってなんだっけ？ 全然覚えてないんですけど……）

大丈夫だ。そんな偶然あるはずがない。「宮瀬」という人は星の数ほどいるではないか。

一葉は気を取り直し、別の質問をする。

「どんな人だった……？」

「すっごいイケメンよ！ こう、なんていうのかしら涼しげな笑みを浮かべてる……とにかくイケメン！」

「あとは？」

母の語彙力のなさはさておき、父にたずねる。

「穏やかで余裕のある大人の男性、という感じだな。とてもにやかな方だったよ」

穏やかでにやかな男性ならば、絶対に違う。部長のはずがない。一葉は胸をなでおろした。

（まあどうでもいいけど。っていうか、部長と同じ名字っていうだけで、もうあり得ないでしょ。遺言相手さんには悪いけどイメージダウンにつながっちゃったし、うん、ないない）

一葉は婚約を断る算段を頭の中に並べた。

翌日の日曜日。

午後のお茶の時間に宮瀬家へ呼ばれているということで、一葉は教えてもらった住所をスマホで検索し、確認しながら歩いていった。街路樹の銀杏は輝く金色に染まっている。

くるみ色のワンピースにトレンチコートを羽織る一葉は、吹いてくる風に身を縮ませた。そろそろ秋は終わり、冬がやってくるのだ。

「あ、あれ？ なかなか着かない……」

さつきから同じところをグルグル回っているような気がする。

それでもスマホの指示通りに進み、ようやくたどり着いた門の前で驚愕した。

「ずっと続いていた外壁は、この家のものだったの!」

路地に沿って続く長い長い外壁の内側には木々が植えられており、中は見えない。一葉は、そこを公園か何かの施設——例えば美術館や資料館だと思っていたのだ。

東京のど真ん中にある家としては、土地の広さが尋常ではない。さすがは旧華族である。

巨大な黒い門は閉まっただけで、とても静かな雰囲気だ。門の向こう側の小道は、木陰のせいで薄暗く、どこまで続いているのかわからなかった。

時計を見るともうすぐ三時。日が陰り始めているし、急いで中に入ったほうがいいのだが……

「門が大きすぎる。って、いったいどうやって入ればいいの……?」

きよるきよるしている、門扉の横に小さなインターフォンを見つけた。恐る恐るボタンを押してみる。

「はい、宮瀬でございます」

すぐに返答がきた。一葉は小型カメラに向かって口をひらく。

「藤村と申します。あの」

「藤村さま、お待ちしております。少々お待ちくださいませね」

そう言われたものの、その場で五分以上待っても、誰もやってこない。

「まさか門前払いとか……? やっぱり庶民は無理なんだよ、お父さん」

ひとりごちた一葉が、スマホで父母に連絡を入れようとしたときだった。

ぎぎいという音を立てて、大きな門がゆっくりとひらかれる。

「お待たせいたしました。藤村一葉さまでいらっしゃいますね?」

背の低い、六十代前後と思われる女性が現れる。どこからやってきたのか、まるで心配がなかった。

「は、はい。藤村一葉です」

「私は家政婦しております、田所須磨子と申します。以後、お見知りおきを」

須磨子は低い声のゆったりした口調で、丁寧にお辞儀をした。あわてて一葉も頭を下げる。

「こちらこそ、はい」

家政婦がいる家にお邪魔するのは初めてだ。雰囲気からして、一日に二、三時間きてくれる家事代行ではなく、長年ここに住み込みをしているに違いない。

「皆さまお待ちでいらっしやいます。どうぞこちらへ」

「お邪魔します」

目の前は幅が三メートルほどある、石造りの小道だ。須磨子のあとをついていく。

両側に木々が連なる小道は、途中、ゆるやかなカーブを描いていた。そのせいもあるのか、まだ家がまったく見えない。

「ふふ……噂に違わず、お可愛らしいお嬢さまで」

「え?」

こちらを振り返った須磨子がつぶやいた。一葉を上から下まで眺めてにんまりと笑う。

「お邸はすぐですので、もう少々私についてきてください」

「はい」

「本当にお可愛らしい、ふふ、ふ」

不気味な笑みを浮かべた須磨子が、何度も一葉を振り返る。

（こ、怖い……。はたして私、無事に帰れるんだろうか？ 噂に違わず、つて……お父さんが私のことを可愛いとかなんとか言ったんだろうか。親バカで恥ずかしい……）

秋風に木立がざわめき、枯れ葉がひらひらと落ちてきた。うつそうとした木々のせいで、午後三時だというのに夕暮れのように暗い。

小道のカーブをすぎると、ようやく家が見えてくる。家、というより館だ。まるで観光地にあるような、古く、大きな洋館である。

「立派なお宅ですね。……すごい」

近づく邸宅と自分の距離とを測り、一葉はつぶやいた。これでは門まで五分以上はかかるだろう。須磨子の到着が遅かったのもうなずける。

広々とした、イギリス式の庭園を手前に佇む二階建ての洋館。その一階は、アーチ状の大きな窓が三つ、並んでいた。二階は同じ大きな格子窓だ。三角屋根の搭屋までついている。

建物の美しさに感心する一葉を、須磨子が振り返った。歩きながら宮瀬家について語り始める。

「大正時代に建てられたそうです。江戸時代に旗本であった宮瀬家は由緒正しい旧華族でして、

先々代は株の取り引きや銀行とのつながりも——」

これでは父母が圧倒されたのも無理はない。祖母も、初恋の彼がこのような家の人では、あきらめざるを得なかっただろう。そしてそれは一葉も同じだ。

「本当に立派です。だから私みたいな庶民が嫁ぐなんてことは、あり得ませんよね」

いくら遺言があるからといって、身分違いも甚だしい。結婚しても上手くいくわけがないのは目に見えている。

「そうとは限りませんよ、ふふ、ふ」

さつきとは違う意味深な笑みを浮かべながら、須磨子は玄関ドアに手をかけた。

玄関へ入ったとたん、上品な香りがする。それに交じって古い建物特有の香りもした。図書館のような、美術館のような……

「いらつしやいませ、藤村さま」

「ひっ」

突然男性に声をかけられた一葉は、恐怖におののく。

そこにいたのか、と突っこみたくなる場所に男性が立っていた。玄関に明かりはついているのだが、ここもまた薄暗く、奥まであまりよく見えないのだ。

今度は初老の男性だった。ひよろりとした体つきの、なかなかダンディなロマンスグレーである。彼は家の中にもかわららずスーツを着ていた。

「初めまして。私は宮瀬家運転手、兼庭師、兼執事、兼——」

「長いわよ」

須磨子はひじで男性の横つ腹をどつく。うっと呻いた男性が頭を下げた。

「失礼。代々宮瀬家に仕えております、岩波新次郎と申します。以後、お見知りおきを」

「は、初めまして。藤村一葉です」

一葉が挨拶をすると、新次郎が目尻にシワを寄せて微笑む。優しそうな人物だ。彼は須磨子を見て、ふうとため息をついた。

「まったく、私が玄関まで藤村さまをお迎えに行くと言ったのに」

「どうしても私がお迎えしたかったのよ。克坊ちゃんのご婚約者さまのお顔を、一番に拝見したくて」

「また腰が痛くなったらどうするつもりなんだ？」

ふふ、と笑う須磨子に新次郎が苦い顔をする。

「大丈夫よ、ここところずっと調子がいいんだから」

「しかし——」

「あの……」

玄関から一向に進もうとしないふたりに、一葉は声をかけた。一刻も早く婚約を断つてさっさと帰りたい。

新次郎と須磨子がハツとした。

「失礼いたしました！ さあ、こちらへどうぞ。須磨子さんはお茶を用意して」

「一葉さま、コーヒーでよろしいですか？」

「あ、はい。お気遣いなく」

「それではのちほど、お部屋へお持ちいたします」

須磨子はそそくさと、どこかへ行ってしまった。一葉は新次郎のあとについて、赤い絨毯の敷かれた暗い廊下を進む。

壁にぼつん、ぼつんと明かりはついているのだが、光量が少ない。よく見ると、それらは百合の形をしたアンティーク調の可愛らしい照明だった。いや、調ではなく、アンティークそのものだろう。この家は大正時代に建てられたと須磨子が言っていたではないか。

それにしても静かだった。

なぜか靴を履いている新次郎の足音と、一葉のスリッパがパタパタいう音しかしない。薄暗い館にスーツを着た初老の執事、不気味に笑う家政婦——まるでホラー映画のようだ。そう思いついて一葉はぞっとする。その類のものにはめっぼう弱いのだ。

(夏じゃなくてよかった。ううん、秋でも怖い。いやいや、こんなの春夏秋冬いつでも怖いよ)

悶々と考えている間に廊下の突き当たりへたどり着く。角を曲がると、奥に大きな木製ドアがあった。

新次郎が立ち止まり、一葉も同じように足を止める。

「藤村さまをお連れしました」

ノックしながら新次郎がドアの向こう側へ声をかけた。

「どうぞ」

どこかで聞いたことがあるような男性の声が中から届く。声の主が一葉の婚約相手だろうか。体が緊張に包まれた。だが、びくびくしている場合ではない。しゃんとしなければ。

「藤村さま、どうぞ」

ドアを開ける新次郎に促されて一葉は部屋に入った。

「失礼します」

広々としたリビング、もといサロンだろうか。なんと呼ぶのか知らないが、その部屋の中央に置かれた巨大なソファに男性が座っている。

「え……、あーっ!!」

驚きのあまり、声が飛び出た。

「人の家に入るなりデカイ声を出すな、藤村」

よく知る男性が大きなため息をつく。そう、あの一葉が大の苦手とする「宮瀬部長」がソファに座っているのだ。いつものスーツ姿ではなく、白いシャツにカーディガンを羽織ってジーンズを穿いている。雰囲気は違うが、何度目でも「宮瀬」に間違いない。

「あ、あ……う、嘘っ!」

単なる偶然的「宮瀬」であり、同じ名字でちよつと気分が悪いだけの話だと思っていたのに。

「いえあの、まさか……本当に？ 宮瀬部長？ ですよね？」

一葉は失礼だとわかっていながらも、彼を指さした。声が震えてしまう。

「ああ、間違いなく俺はお前の上司、宮瀬克だ」

宮瀬——克は長い脚を組み直し、ひじ掛けに片ひじを乗せた。

「な、なななんて、部長がここに!？」

「ここは俺の家だ。いたら悪いのか？」

克が口のはじで笑う。が、目は笑っていないのが離れていてもわかった。

一葉は姿勢を直し、お腹に力をこめる。

「部長の家だと知ってたら絶対にきませんでしたけど！ って、もしかして」

「なんだ？」

「私の祖母の葬儀に、いらつしゃいました……？」

話しながら気づいた一葉は、彼に問う。

「ああ、伺ったよ」

克が静かにうなずいた。

「やっぱり……。ということは、部長が本当に私の——」

「許嫁だ。俺がお前の、な」

「し、信じません!」

「俺もいまだに信じられないが、どうやら本当のようだ」

落ち着き払っている克の様子に一葉は絶句する。

なぜそうも素直に受け入れているのか。遺言で決められた許嫁など、この時代、断ればいいは

ないか。

「私は受け入れられません。ということで、ここで帰り——」

「うふふ、楽しい方ね」

ふいに柔らかな声があった。そちらを向くと、克とは別のソファに女性が座っている。話に夢中で克のこと以外見えていなかった。

「あ、すみません……!! ご挨拶もせずに」

「いいのよ、もつとお話聞かせてちょうだい」

穏やかに優しい笑みだ。着物を着た、たおやかな雰囲気の人である。

「あの、あなたは……」

「克の母親、志緒子と申します。これからよろしくね」

静かに志緒子が立ちあがる。上品、という言葉がぴったりな女性だ。克の母だとすれば一葉の母より歳上だろうが、まるでそんなふうには見えない。

若々しく、おっとりした様子の彼女に見とれていた一葉は、あわてて頭を下げる。

「こちらこそよろしくお願ひしま、ではなくて……!!」

危うく、志緒子の雰囲気呑みこまれるところだった。すぐさま顔をあげる。

「あら、どうしたの?」

「私、婚約はしません」

一葉はきつぱりと言い放った。志緒子が目を丸くする。

「まあ……どうして?」

「祖母の遺言を大切に思ってくださいなのは、とても嬉しいです。私もおばあちゃんが大好きだから、その願いを叶えてあげたいとも思います。でも、それと結婚は違うんじゃないかと。だから——」

「花嫁修業にきたんじゃないのか」

克が話に割って入った。彼はソファに座ったままでいる。

「それは……本当に婚約するなら花嫁修業でもなんでもやりますけど。っていうか、好きでもない部下と遺言のために結婚するなんて、部長だってイヤですよね?」

「俺は祖父の気持ちを大切にしたい。だからお前と結婚するのは一向に構わない」

「おじいさんのため、ですか」

「……そうだ」

祖父のためであつて、自分のためではない。そして一葉のためでもない……結婚。胸の中にもやもやとしたものが広がる。

「そんな愛のない結婚なんてイヤじゃないんですか? 私はイヤです」

一葉は首を横に振りながら克に訴えた。

「何事もやってみなければわからないだろう。愛が生まれるかもしれないじゃないか」
克が一葉を見つめる。

「は、はあ?」

理解ができないと感じつつも、なぜか胸がドキツとする。イケメンにこんなセリフを言われたら、その気がなくても惑わされてしまうのではないか。

そんな気持ちも振り払って一葉は口をひらいた。

「冗談もほどほどにしてください。では、失礼します」

歩き出そうとした一葉の背中に、克の言葉が投げられる。

「花嫁修業をする前から放棄するのか」

思わず足を止めた。

「……放棄？」

「やりもしないで逃げ出すんだらう？ この家のことを何も知らないのに」

振り向くと、克は立ちあがり、強い視線を一葉に向けていた。志緒子は困ったような表情で、彼と一葉を交互に見ている。

「に、逃げも隠れもしてません。だからこうして、ここまで来たんです」

「会社にいるときは、もつと根性があるじゃないか」

「え……」

根性がある？

いままで克にそんなふうに言われたことはなかった。注意を受けるばかりで褒められたことなど記憶にない。

「お話中のところ失礼いたします。お飲み物をご用意いたしました」

須磨子がワゴンを押しながら入ってくる。コーヒーの香りが漂い、あたりを満たした。

「須磨子さんありがとうございます。とりあえずお茶にいたしましょう？ ね、一度座って、一葉さん」

「……はい」

「克も、ね？」

志緒子を困らせてしまったのは申しわけない。

一葉は彼女の言葉に従い、克のとなりに座った。それにしても恐ろしく座り心地のよいソファだ。

「お砂糖はおいくつですか」

「あ、じゃあふたつください」

「かしこまりました」

須磨子が丁寧に用意してくれたコーヒーのカップは、有名な陶器のブランド品だ。

「……いただきます」

コーヒーなど飲んでいる場合ではないのだが、とりあえず口をつける。飲みながらこのあとのことを考えようとしたが、口に広がる香りとコクのある苦みに、自然と顔がほころんでしまう。

「おいしい……！ です」

「よかつたら、これも召しあがって」

志緒子が差し出したのは、お皿に綺麗に並ぶアイスボックスクッキーだ。市松模様はチョコとプレーン味だろうか。

「いただきます。ん……？ お、おいしい〜！」

歯触りのよいクッキーが舌の上でほろほろと崩れていく。バナラとチョコの豊かな風味がクセになりそうだ。

「お口にあったのなら、嬉しいわ。私が作ったのよ」

「本当ですか？ お店で売っているのよりも、もっとおいしいです！」

「ありがたい。うちは男と、私も含めて年寄りしかいないでしょう。だからあまり食べてもらえないのよ。一葉さん、たくさん召しあがってね」

志緒子が心から嬉しそうに微笑む。上品で若々しくて、そのうえ優しい。素敵な女性だ。

二枚目のクッキーを口にしたとき、克の視線を感じた。手を止めて、となりの彼を見る。

「うまいか？」

目が合うと同時に問われた。

「え、ええ」

「よかったな」

またも、普段なら口にしないような克の言葉に戸惑う。

彼もクッキーをひとつ手にして口へ放りこんだ。綺麗な食べ方をする、と一葉は思う。

会社の飲み会で一緒になったことは何度もあるが、近くへ座ったことがないので知らなかった。

こんな姿をじっくり観察するのは初めてだ。

コーヒーを飲んだ克が、再び一葉と視線を合わせる。

「断るのは、この家のことをよく知ってからでも遅くはないだろう。お前のおばあさんと、俺の祖

父のことをもっと知りたくはないか？」

「それは……」

祖母の若いころのこと。

一葉に託された思い。克の祖父との関係。

ここにいれば、自分の知らない祖母の一面を知ることができるかもしれない。それはおばあちゃん子だった一葉にとって、むげにできない提案だ。

「知りたくないなら、構わない。何もしないまま逃げ帰って、ご両親に修業に耐えられなかったと話せばいいだけだ」

「に、逃げませんけど！」

「そうか。逃げないんだな？」

克がじろりと一葉を見た。

「う……」

ついうっかり、会社にいるときのクセで答えてしまった。売り言葉に買い言葉だったとも言えず、一葉は頭をフル回転させる。どうにかこの状況を変えられないだろうか。

「……十日間だけなら」

稚拙な思いつきだが、これしかない。

「なんだ？」

「お試し期間として、十日間、花嫁修業をするという約束だけなら、いいです」

とりあえず十日間この家で花嫁修業なるものをし、お互い合わないということがわかれば、期待する人たちにあきらめてもらえるだろう。克も目が覚めるはずだ。

「いいんじゃないか。十日間やってみて、先のことはそれから考えろ」

「いいんですか？」

あっさりとした承する克に拍子抜けする。

「しばらくこの家において、俺のこともたくさん知るといい」

「べ、別にあなたのことなんて、これっぽっちも知りたくはありません」

「えらく嫌われたもんだな」

ははっ、と克が笑った。今度は貴重な笑い声である。

克のことを知ろうが知るまいが、結婚しないことに変わりはない。一葉は祖母のことを知りたいだけなのだ。

「それじゃあ決まりね。一葉さん、しばらくここで楽しくすごしなさいな」

志緒子がホッとしたように声をかける。

逃げないと宣言したのだから、ここは腹を決めてやるしかないだろう。

「よ、よろしく願います」

一葉は改めて、志緒子に頭を下げた。

「今日はいったん家に帰って、今週中に、またここへくるといい」

立ちあがった克が一葉を見下ろす。シャンドリアの明かりが逆光になり、その表情はよく見えないのだ。

いが、背の高い彼に見下ろされると、いつも以上に迫力があって怖い。

克は百八十センチ超えだと先輩たちに聞いている。背の低い一葉と三十センチ近くも身長差があるのだ。

「……わかりました」

「泊まりこみな」

「え……ええっ!？」

「必要な荷物をまとめて、ここに送れ。この家の住所は……知ってるな？」

「……知ってます、けども」

一葉の両親と克は会っている。克はそのとき、自分が一葉の上司だと伝えているはずだ。だからこそ、両親はこの結婚に賛成した。そう考えると辻褄は合う。そして、婚約者が祖母の亡くなったことを知っていた理由も、一葉が克に報告していたのだから当然だ。

父が言葉^{ことば}を濁したのは、克が相手だということを隠したかったためだろう。なぜ隠したのか、家に帰ったら追及しなければ。

それにしても、まさかの鬼上司と同居とは。

会社でどやされて、やっと仕事が終わって家に帰ってもまたそこに同じ上司がいる。勘弁してほしいという気持ち^{こころもち}が知らず知らずのうちについ、顔に出てしまったらしい。

「できると言ったよな？」

ドスのきいた声を投げかけられる。頭上からの威圧感が半端ない。

「い、言いましたっ！ ……やればいいんでしょ、やれば……！」
一葉は半ばヤケで叫ぶのだった。

その日の帰り、一葉は克に送ってもらうことになった。
克が運転する車。その助手席に乗るなど、想像したこともなかった。彼のとなりに座るのは落ち着かない。

「ひとりで帰れるのに」
「いいだろう、俺が送りたいんだから。家に帰るまでに、未来の花嫁に何かあっては困るからな」
しらじらしい嘘などつかず、本音を言ってくれたほうがましだと、また一葉の胸がモヤモヤする。
「いつも会社からひとりで帰ってるんですけど。それに、本気でそんなこと思っていないクセに、どうしちゃったんですか」

「思ってるよ」
「嘘です」
「どうして嘘だと思う？」

不機嫌な声を出されると仕事中のやり取りを思い出してしまう。一葉はたじろぎつつ、克の顔を窺った。

「迷惑じゃないんですか？ 私なんか花嫁候補で」
「藤村は迷惑そうだな」

「だってそうじゃないですか。さっきも言いましたけど、おばあちゃんのこと大好きだし、おばあちゃん願ひなら叶えてあげたいと思います。でも、いくらなんでも、いきなり結婚だなんて」
「まあそうだろうな。藤村お前、彼氏はあるのか？」
「……いたら、わざわざ部長の家まで行くわけがないじゃないですか」
「だよな、悪い悪い」

「ほんと失礼ですよね」
苦笑する克に腹を立てつつも、なんとなく聞いてみたくなった。

「部長は……？」
「俺？」
「恋人、いますよね？」

改めて間近で見ると彼は、やはりかなりのイケメンだ。三十を超えた落ち着いた大人の雰囲気のまま、仕事もデキる。性格はともかく放っておかれるのは不自然だろう。

「恋人がいるのにお前と婚約しようっていう、軽薄な男に見えるのか、俺は」
克が呆れた声を出す。

「そういうわけじゃないですけど、その……部長って、カッコいいと思いますし、先輩たちも恋人がいらないようには見えないって、言ってたので」
「……カッコいい？」

克が顔をしかめて不審げに言った。自覚がないのだろうか？

「はい。みんなそう言ってます。結婚してないのが不思議なくらいだって。だから、平凡な私と結婚なんてイヤですよね？」

「俺は、本気でお前と結婚してもいいと思ってる」

真剣な声だった。一葉の胸がきゅっ、と痛む。

(別にときめいたわけじゃない……はずなのに、なんだんだろ、これ)

一葉は胸を押さえながらフロントガラスのほうを向いた。克の顔がまともに見られないのだ。普段の、部長の顔でいる克とのギャップが、そうさせるのかもしれない。

「どうして、結婚してもいいなんて思うんですか」

「どうしてなのか、うちへ花嫁修業にきてから教えてやるよ」

交差点の手前で車が停車する。赤信号だ。

「会社では普通にしていよう。知られたらお前が迷惑そうだからな」

「それは当然です。部長だって困るでしょうに」

「うちは社内恋愛禁止ではないぞ？」

ハンドルに手を置いていた克が、こちらを覗きこむようにして言った。

「……っ！」

一葉の顔がぼわっと熱くなる。男性に免疫がないのだから、こんなにそばにこないでほしい。

それに、社内恋愛？ この鬼上司と自分が……？ あり得ない、絶対にあり得ない……！！

「もしかして藤村、お前……」

「は、はい？」

「そんなに真っ赤になって、恋愛経験があまりないのか？」

「うっ、なっ、何を」

「やっぱりそうか。……可愛いな」

克がクスツと笑った。

「かっ……!?」

可愛い!?

耳を疑うと同時に、車が発車した。

恋愛初心者なのは確かだ。それを見抜かれたのは仕方ないとして、あの部長が自分を可愛いなどと……、天変地異でも起きるのではないだろうか。

とにかく、だ。

一葉は背筋を伸ばして平静を取り戻す。

克を含めた宮瀬家は、なぜか一葉を受け入れている。それも好意的に。一葉の両親もこの結婚には賛成のようだ。反対しているのは一葉だけ。気を抜いたら、なし崩しに結婚することになってしまふ。いったいどうすればいいのだろうか。

「ここでもいいのか」

「えっ、あ、はい」

そんなことを考えているうちに車は家の前に着いていた。

「じゃあな」

「ありがとうございます」

「ご両親によろしく」

「……はい」

シートベルトをはずしてドアに手をかける。出ようとしたとき、克に二の腕を掴まれた。

「なっ、なんですか」

焦る一葉とは対照的に克が意味深に笑う。

「楽しみにしているからな」

「はい？」

「お前が俺の家にくることだよ。……楽しみにしてる」

冗談には思えない表情に、胸の鼓動が速くなる。

「し、失礼しますっ！」

振り切るようにして車のドアを開けた。秋の夕暮れは早く、一葉の足元まで群青色になっている。

一葉は去っていく克の車を見つめながら、小さく息を吐いた。

「お父さん！ 宮瀬さんが私の上司の宮瀬部長だって、知ってたの!？」

一葉は家に入るなり、リビングのソファに座っていた父に詰め寄った。

「……知ってた」

「どうして言ってくれなかったのよ!？」

気まずそうな顔をする父に問う。知っていたら、それなりの心構えもできていたのに。いや、そもそも克だとわかった時点で即、断ることができた。

キッチンから出てきた母がダイニングテーブルに夕飯の準備を始める。

「お母さんも、どうして!？」

「だって、教えたらあなた、絶対に行かないって言いそうじゃない」

「それはそうだよ。毎日顔を合わせてる上司だよ？ そんな人が婚約者だとか急に言われたって無理」

戸惑う一葉をよそに、テーブルには、豆腐サラダと鳥の唐揚げ、里芋などの根菜の煮物が並べられていく。

「宮瀬さんもそれを懸念しててなあ。宮瀬家で一葉と会うまでは、言わないでほしいと」

父の言葉に首をかしげる。

克が懸念……？ 彼はそうまでして祖父の遺言を守りたいのだろうか。

「とにかく、みんなで騙だましてたのね」

「一葉と同じ会社の方、それも上司なら安心だと思って婚約に賛成したんだよ。彼は一葉のことをよく見ていてくれたみたいだし。まあ、言わなかったのは悪かった。ごめん」

予想通りの答えである。

「……荷物、部屋に置いてくる」

一葉は手を洗い、部屋で着替えて再びリビングに戻った。

腹が立っているので部屋に引きこもろうかと思ったが、今後のことを報告しなければならない。

「それでどうだったの？ お断りできた？」

ダイニングテーブルについた一葉と父に、母が缶ビールを持ってくる。

「花嫁修業はすることになった。十日間だけね」

「あら、すごいじゃない！」

父も嬉しそうにうなずいている。

「すぐくないよ。お試し期間を設けてもらっただけ。別に結婚する気は——」

「わかってるわよ。それでもお母さん応援するわ。頑張つてね！」

「頑張るも何も……」

父と同時に缶ビールを開け、グラスに注ぐ。母も席に着いた。

「家政婦さんがいるから、嫁がやることなんてなさそうだけどねー」

「そんなことないでしょ」

「そんなことあるよ。須磨子さんっていうんだけどね、きっとあの家で長く家政婦をしてたんだらうね。陰の仕切り屋って感じがする」

家政婦の須磨子は、ただものではない雰囲気たぐよを漂たぐよわせていた。

「その家政婦さんに鍛えてもらえるように、お母さん伝えておくわ」

「余計なことしないでっつてば」

嬉しそうな父母はグラスを掲げて乾杯している。一葉は宮瀬家のことを思い出しながらビールを口にしていた。

しかし、克が旧華族のお坊ちゃまだったとは。彼に詳しい女性の先輩たちからも聞いたことがない。克を引き抜いた社長以外は知らないのではないだろうか。

旧華族の御曹司。そんな人がなぜ、革製品のメーカーで働くのだろう。それも、会社に貢献できなくらいに仕事に力を入れている。

立派な邸宅に住み、使用人までいる家なのだから裕福に違いないと思うのだが……

「そういえば、部長のお父さんっていないのかな。お母さんには会ったけど」

「いや、いらっしやるそうだよ。宮瀬さんには大学生の弟さんもいるとうかがった。会えなかったのか？」

「うん。ふたりともいなかった。部長の弟……」

克に似て気難しかったらどうしようか。克の父親は、彼よりもさらに怖いかもしれない。

(何かあったらその場でやめよう。どうせ結婚は断るんだから、気に入られる必要はないんだし)

一葉は生姜しょうがのきいた唐揚げをほおぼり、グラスのビールを一気に飲んだ。

翌日、会社に行くと、克はいつも通りだった。そうしようと約束したのだから当然だが。

彼が言った「可愛い」の言葉は幻聴だった。そう思わざるを得ないほど、バンバン注意、もといお叱りを受ける。

(やっぱり無理。あんな奴と結婚とか、どう考えても無理……！)

だが、克に細かく叱られることで、一葉の仕事能力は入社当時よりも格段にあがっていた。ムキになってしまいう性格を利用してやるような気がして、それもなんだか悔しい。

そして、週末の金曜に宮瀬家へ移動する。着替えなどの荷物はすでに送ってあった。

宮瀬家は会社と同じ沿線の駅から、徒歩十五分ほどの場所だ。オシャレな商業施設は駅周辺だけ。そこを離れると巨大な家々が立ち並ぶ高級住宅街に入る。その一角にあるのだ。

宮瀬家に到着すると、待ちかねていた須磨子に、二階の部屋へ通された。

「こちらでございます」

「い、これは……！」

まるで映画や絵本に登場する、お姫さまの部屋ではないか。いや、本物のお姫さまの部屋がどうかはよく知らないのだが、たぶんこういう感じで合っているはず。

「ここを使うんですか!？」

一葉は目を白黒させながら須磨子に聞いた。

「さようでございますが、何か？」

「他は……」

「この廊下に面するお部屋は克坊ちやまのお部屋と、一葉さまが使われるお部屋と、もうひとつの客室だけでございます。角を曲がった廊下に、克坊ちやまの弟君、修さまのお部屋があります。その奥にサロンが……」

須磨子が得意げに答えていく。

「あの、他にお部屋はないんですか？」

自分が使う部屋のすぐそばに克の部屋があるなんて、それでは一日中気が休まらない。

「他の場所も知りたいと？ 素晴らしい心がけてございますね。ご案内いたします」

一葉が使う別の部屋がないかとたずねたのだが、須磨子は勘違いをしたようだ。

だが、どこかしらに空いている部屋があるかもしれない。

「ええまあ、そうですね、はい」

褒めてくれたのだし、ここは受け流しておくことにした。

「かしこまりました。では行きましょう」

ふふ、と笑う須磨子についてゆく。赤い絨毯が敷かれた木造の階段を下りて一階へ。

階段がぎしぎしと軋む。踊り場の窓はステンドグラスだ。

先日訪れたときも思ったが、夜はひとりで歩き回れなさそうなくらいに、雰囲気がある。自然と須磨子に近づく一葉だった。

一階は、玄関のそばが使用人の控室になっている。そこは主に執事兼、運転手兼……のロマンスグレー、新次郎が使っているらしい。彼はそこを改造して、寝泊まりをしているという。

先日一葉が通されたリビングとダイニングの前を進み、克の父母の寝室の前も通りすぎる。その先の廊下から突如、日本家屋の作りになっていた。廊下の両側にふすまで仕切られた部屋が並ぶ。

そのひとつを須磨子が手で示した。

「ここが私の部屋でございます。そして向かいと、そのとなりも女中部屋です。いまは奥さまのご衣裳やら、季節のお品物が入っております」

「女中部屋？」

「さようです。昭和初期まで何人も女中が勤めていたそうですから」

「どちらも六畳の畳敷きの部屋だった。箆たす笥と長持ちが置いてあるだけで、あとは何もない。押し入れは使っているようだ。」

「あ、じゃあ、私はここでいいです。すみっここで寝ますので」

須磨子に言うと、彼女は顔を歪めた。

「あれま、それはいけませんよ。二階のお部屋が一葉さまのお使いになるところなんですから」

「でもあんなに広い客間をひとりですうなんて、申しわけなくて、それに狭いほうが落ち着きます。須磨子さんがおとなりなら安心だし」

あんなにも立派な客室を使うことになったら、いつの間にかすっかり気に入って家を出ていきにくくなってしまいかもしれない。

「ね？ 須磨子さん、お願いします」

一葉は祖母に可愛がられて育ったせいも、歳上としに甘える方法が自然と身についている。

須磨子の腕をちよんと突つくと、彼女は頬を赤らめ、照れた。

「まあ、私がついもお掃除しますから、ここは綺麗ですけれども。でもやはり克坊ちゃまにお伺いしてからにいたしましょう」

「私がどこで寝ようと、部長は何も言いませんよ」

「そんなことはありませんっ！」

ふてくされ気味に言う一葉に、須磨子が全力で反応する。廊下中に響き渡る声量だ。

「克坊ちゃまは、そのようなお人ではありません。お優しく、頼りになって、男らしい……ええと、なんと申しますか……ああ……そう！ 本物のイケメンなのです！」

「は、はあ」

須磨子の勢いに押されてたじろぐ。

「坊ちゃんはこの宮瀬家のために、それはそれはご苦労なさっていて……！」

両手を握りしめた須磨子が天井を仰いだ。

家のための苦労とは、どういうことだろう。

「ですからね、一葉さまが女中部屋で寝るなど、お許しになるかどうか」

「どうした？」

突然、暗闇から声が出た。一葉は思わず、ひっと肩を縮ませる。だがよく見ればそこにいたのは、話題の人、克だった。

「克坊ちゃま……！ おかえりなさいまし」

「ただいま。何を探めているんだ？」

一葉はどつくに社を出ていたが、克は残業をしていた。帰ってきて、一葉と須磨子のやりとりを聞きつけたのだろう。